

【暗唱聖句】

創世記 6:8 「しかし、ノアは主の好意を得た」

【日曜日・罪の原則】

神様が創造された世界は、創世記 1:31 で「極めて良かった」と言われるほど、素晴らしい世界でした。しかし、罪が侵入した結果、そこは極めて良い世界ではなくなってしまいました。人類の罪は愛の神様でさえ許容できないほど酷いものになっていました。罪は、まず「女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」(創世記 3:6) ことから始まりました。アダムは神様からなぜ食べたのかと問われると、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださいました。木から取って与えたので、食べました。」(創世記 3:12) と、その責任をエバに、さらには神様にまで押しつけようとしてしまいました。罪の影響は彼らの子どもにも波及していきました。兄のカインは、弟のアベルの捧げ物は神様から顧みられたにも関わらず、自分の捧げ物が顧みられなかったことで、神様に対する「激しい怒り」(創世記 4:5) が芽生えました。そして、その怒りは弟に向けられ、「弟アベルを襲って殺し」(4:8) てしまったのでした。また、罪は夫婦の在り方も狂わせました。カインの 5 代目にあたる子孫「レメクは二人の妻をめと」(4:19) ります。そして、「わたしは傷の報いに男を殺」(4:23) すと宣言するのです。6章 2 節では、「神の子らは人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした」とあります。この聖句は諸説あるのですが、神の子と表現されたセトの家系あるいは神様に従う者と、人の娘と表現されるカインの子孫あるいは神様に従わない人とが結婚するようになります。また、神様の御心によって選ばれた相手ではなく、自分がそれぞれ好きな人を選んで結婚するというようになっていきます。そして、神様をご覧になると、「地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計」(6:5) り、「この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた」(6:11) でした。このように罪の始まりは小さくても、それはどんどん膨らんで大きくなり、自分だけでなく周囲にも影響を及ぼしていくのがわかります。確かに洪水前の世界と現在とでは、大きく違うことでしょう。しかし、罪の原則は変わりません。

【月曜日・人間ノア】

創世記 6:9 「ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ」(新共同訳)、「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」(口語訳)

ノアの特徴は、「正しく(神に従う)」、「全き人(無垢な人)」、「神と共に歩んだ」という 3 つです。「正しい」と「全き」という同じような言葉が繰り返されていますが、これは神様の御前に正しいということと、人に対しても正しい人だったということを示している。ペテロはノアを「義の宣伝者」(第二ペテロ 2:5) と呼んでいます。そして、さらに重要なのはノアが神様と共に歩んだということです。

創世記 6:8 (口語訳) に、「しかし、ノアは主の前に恵みを得た」とあります。新共同訳は、「ノアは主の好意を得た」とありますが、直訳は、「ノアは主の瞳の中に恵みを見た」です。主と歩むノアは、主の目を見たとき、そこに自分に対する愛と恵みを見たという感じでしょうか。このことから、ノアは完全無欠というわけではなく、やはり主の恵みを必要としていたことがわかります。神様の恵みなしに、人が救われることはないのです。

【火曜日・ノアと結ばれた契約】

創世記 6:18 「わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい」

神様はノアと契約を立て、ノアとその家族を救うことを約束されました。この契約を成立するためには、ノアは箱舟を造り、家族と一緒にその中に入る事が求められました。一見、簡単なように思えるかもしれませんが、舟を造ることは想像を絶するような困難があったことと思いますし、家族が神様の言葉を信じなければ、舟の中に入ろうとは

しなかったかもしれませんが。また、通常契約とは2者間の間でなされるものですから、わたしたちの契約を言っても良いのですが、原文では神様が「わたしの契約」と言っています。これはこの世の契約とは違う、絶対的な確かさを強調すると共に、わたしたちが契約を結ぶ相手が神様なのだと意識させていると思われます。人間同志の契約も大きな効力を持つものですが、不履行となり破棄されることも多いのです。

【水曜日・しるしの虹】

洪水後、神様は再びノアと契約を結びます。その契約は二度と洪水で地上を滅ぼすことはしないというしるしとして、雲の中に虹を置かれました。

創世記 9:12 更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。 9:13 すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。

「私の契約」と言われたときと同様に、「わたしの虹」（創世記 9:13）と表現されることで、この約束の確かさを強調しています。また、この「しるしの虹」の契約を交わす相手はノアではなく、すべての「生き物」となっているのも他の契約と異なる点です。つまり、現代の私たちも包括されているということです。

さらに、創世記 9:14 に、「雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたち…との間に立てた契約に心を留める」と書かれてあります。忘れやすい人間に対して、虹を見て神様との約束を思い出しなさいと言われていたのではないのです。神様ご自身が思い出すとっておられるのです。これは、それだけこの約束を神様は大切に思っておられるということ、そして、たとえ私たちが神様との約束を忘れるようなことがあっても、神様は決して忘れない。だから「不安なことが起こったとしても、恐れることはない」と、言われているのでしょう。

【木曜日・そしてノアだけが残った】

「残りの者」という思想が初めて登場するのは、ノアの時でした。

創世記 7:23 「地の面にいた生き物はすべて、人をはじめ、家畜、這うもの、空の鳥に至るまでぬぐい去られた。彼らは大地からぬぐい去られ、ノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った」

「ノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った」の「残った」という言葉は、「残りの者」という意味の言葉が語源になっています。この他にも、旧約聖書には繰り返し残りの者という言葉が出てきます。

創世記 45:7 「神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです」

イザヤ 4:3 「そしてシオンの残りの者、エルサレムの残された者は、聖なる者と呼ばれる。彼らはすべて、エルサレムで命を得る者として書き記されている。」

イザヤ 11:11 「その日が来れば、主は再び御手を下して／御自分の民の残りの者を買い戻される。彼らはアッシリア、エジプト、上エジプト、クシュ、エラム、シナル、ハマト、海沿いの国々などに残されていた者である」

神様はいつの時代にも、ご自分の民として残りの者を持っておられます。残りの者とは、神様の愛と憐みと選びのうちに、残された者たちのことです。残りの者には、残された意味、役割があります。ノアに対して神様は、「生めよ、増えよ、地の満ちよ」（創世記 9:1）と、アダムとエバに語られた言葉をもう一度語られます。

現代生きる私たちアドベンチストも、残りの者です。この世界はノアのと看のように終わりが来ます。そのときに、残りの者としての使命があります。それは他の人々を終わりに備えさせることです。そして、箱舟であるイエス様の入るよう導くことです。